



1 田植踊の中でも「胆沢型」に分類される。杵摺えんぶりすりと弥十郎の掛け合いに合わせ、太鼓を持った鞆鼓かつこと、イネに見立てた鳥の羽を持った奴やつこの踊りで演じられる

2 中盤に演じられる余興的な「中入り」。冒頭で口上が述べられ、道化による苗代ならしやざつつあか踊りと続く

3 鎮守府八幡宮例大祭での奉納演舞。駒形神社新穀感謝祭や梅泉寺春彼岸でも演舞をしている

4 昭和40年頃は家々を回り歩き、その家の豊作を祈願した

奥州遺産

—ときを越え

受け継がれるもの—

上幅庭田植踊

第129回

(市指定無形民俗文化財)

水沢佐倉河

水沢地域の北西部、豊かな田園風景が広がる佐倉河の上幅、一本木地区。上幅庭田植踊は、この地で人から人へと受け継がれてきた。

発祥は不明だが口伝によると、弘長2(1262)年、高山掃部たかやまがもろ長者に『めでためでた』で踊り入ってくるのが大変良い』と一番の折り紙を付けられ、それを誇りに伝えられてきたとされる。

神々に豊作を印象付けて約束させるため、田起こしから始まる1年間の農作業を演じる予祝芸能で、当初は、男性のみの踊り組で伝承された。昭和16年に一度途絶え、31年に復活した時には、女性たちも加わり新たな歴史を紡いだ。

35年には市指定無形民俗文化財に指定。平成18年にまた途絶えたが、現庭元の松本寛章ひろあき氏の呼び掛けにより、21年に再度復活し、精力的に活動している。

豊年満作を願い踊り継がれてきた上幅庭田植踊。郷土への愛着と稲作への思いとともに、この地で根を張り、実り続けていく。

広告